

凡例：「美術と野獣」展の全出品作品について、出品番号・作家名・作品名・作品解説の順で記載した。

1 鴻池朋子 〈Earth Baby〉

キラキラと輝く巨大な赤ちゃんの顔

鴻池の個展「インタートラベラー 神話と遊ぶ人」（2009 年）は、鑑賞者が地球の内部へと旅をしていく展示構成で、本作は地球の中心として展示されました。人間だけでなく、地球上に生きとし生ける生命の源を象徴するかのよう、あらゆる命が混ざり合い、一体となった原初的なエネルギーを放っています。そして、鑑賞者の姿を鏡のように映し出し、自らの根源を探す旅へと誘います。赤ちゃんのように純粋な気持ちで、自分自身と向き合ってみてください。

2 浅井裕介 〈野生の星〉

3 浅井裕介 〈組み合わせの魔法〉

赤い血と青い血

2019 年に〈野生の星〉を制作し、その対作品として、2024 年に〈組み合わせの魔法〉を制作しました。前者は石巻の鹿の血によって赤色系で描かれ、後者は蝦夷鹿の血とレバーから化学変化により作られたプルシアンブルーの顔料によって青色系で描かれています。両者は動脈と静脈のような関係にあり、作家は血を「命の根源の液体」と捉えて画材として使用しています。それぞれが同構図の 8 枚のキャンバスから構成されており、1 枚ずつ入れ替えて展示することも意図して作られた作品です。

4 浅井裕介 〈いのちの手触り 1〉

5 浅井裕介 〈いのちの手触り 2〉

いのちに触ったらどんな感じ？

浅井は、2008 年のインドネシアでのグループ展以来、さまざまな土地の土を用いて描いています。そして、2019 年の牡鹿半島での食猟師との出会いをきっかけに、共に猟に出向き野生の鹿の血も画材とするようになりました。

本作は、鹿皮の上に、一方は鹿の血から作られたプルシアンブルー、他方は赤土とアクリルで描かれています。すべての生命が終着し新

たに生まれる土と、生も死も連想させる血液が、共に用いられています。相反する生と死の循環の中でいのちが存在していることが、生々しい実感を伴って表現されています。

6 浅井裕介 〈土の星の人〉

7 浅井裕介 〈豊かさ〉

今ここで生きているということ

浅井は、2017 年 7 月に道後に滞在し「道後オンセナート 2018」に際して〈土の星の人〉と〈豊かさ〉を制作しました。過去に国内で採取した土に加え、松山の土を多く用いて作られています。人間や動植物などが大画面を埋め尽くし、互いに繋がり合ったり、入れ子状態になったりして描かれています。私たちの足元に広がる巨大な生命圏である大地の温かさ、生命の豊かさが伝わってきます。

あなたが今生きている世界は、どのように感じられるでしょうか。

8 モーリス・ド・ヴラマンク 〈木のある風景〉

「野獣派（フォーヴィスム）」の巨匠

ヴラマンクは「野獣派」の一人です。野獣派とは、1905 年のパリのサロン・ドートンヌ（秋のサロン）の一室に集められた作品を、批評家が「レ・フォーヴ（野獣たち）」と呼んだことに由来する言葉です。野獣派の画家たちは、激しい色彩と荒々しい筆致を用い、人間の感性に直接訴えかけました。

ヴラマンクは、生涯にわたり、自らの本能から生まれる情感を表現することにこだわり続けました。1920 年代以降には、野獣派の頃の鮮やかな色彩ではなく、暗い色調によって田舎風景を数多く描くようになりました。哀愁の漂う風景描写からは、写実よりも自身の感情を表そうとしたことがうかがえます。晩年の作としては珍しく、本作には明るい原色も用いられており、嵐の中のように激しくドラマチックな風景が表現されています。

9 里見勝蔵〈女〉

本能にしたがって描いた「弟子」

里見は、1921年にフランスへ旅立ち、ヴラマンクから直接指導を受けました。1925年に帰国後、日本に野獣派を広めたことで知られています。原色を用い、大胆にデフォルメした裸婦を描いた作品群は彼の代表作と言えます。本作では、裸婦の身体を赤と黄、背景を緑と紫で描くことにより、反対の色同士がお互いの色を引き立て合う補色効果が活かされています。鮮やかな色彩と激しいタッチにより、野性的な情熱をはらんだ女性像が表現されています。

10a ジャクソン・ポロック〈無題〉

10b ジャクソン・ポロック〈無題〉

ポロックの目覚め

ポロックと言えば、床に広げたキャンバス一面に絵具を滴らせる「ドリッピング」や、流し込む「ポーリング」という技法で有名です。

本作は、そのようなポロックの作風が確立する前に、ニューヨークの版画工房で作られた銅版画11点のうちの一つ。ポロックは試し刷りのみを行い、彼の死後1966年に版が発見され、翌年に後刷りされました。銅板を直接彫ることで生まれた鋭く力強い線が、生き物がうごめくような混沌とした画面を作り出し、後の作品への繋がりが見て取れます。

11 ウィレム・デ・クーニング〈頭 No.3〉

人間像へのこだわり

デ・クーニングは、ポロックと並び、20世紀半ばのアメリカ美術界を代表する抽象表現主義の作家です。主に裸婦などの人間像を、荒々しい筆触と流動的な形で表現しました。

1969年以降は、ブロンズ彫刻も制作するようになりました。本作は頭像ですが、目・鼻・口・耳などすべての部分が溶け出してしまったかのようです。勢いのある動きと生々しい肉感、絵画作品にも共通する特徴と言え、作家の激しい衝動と生へのエネルギーが感じられます。

12 カレル・アペル〈裸婦〉

自由に、生き生きと

アペルは、1948年に前衛美術運動のグループ「コブラ」を設立しました。原始美術や民族美術、ゴッホなどの表現主義、子どもなどの美術を評価し、強烈な色彩と自由奔放なタッチで、人間に潜む原初的な感覚を表現しようとしていました。グループはわずか3年で解散しましたが、その手法や姿勢は、後のアンフォルメルや新表現主義に影響を与えました。

本作には、横たわる裸婦が描かれています。赤・黄・黒・白色の流れるような筆致を厚く塗り重ね、生き生きとした生命感が表れています。

13 元永定正〈作品〉

己を生み出す

「具体美術協会」（通称：具体）は、吉原治良の「人のまねをするな、これまでになかったものを創れ」という教えのもと、1954年に関西で結成された戦後日本の前衛美術グループ。1957年に日本に紹介された、フランスの前衛美術運動アンフォルメルに深く共鳴しました。

具体のメンバーであった元永は、1950年代末にキャンバスを傾けながら絵具を直接流していく独自の技法を生み出しました。本作も同様に作られ、原色の鮮やかな対比とダイナミックな躍動感に満ちています。

14 白髪一雄〈猪狩 壱〉

内に秘めたる暴力性

具体の中心的存在であった白髪は、キャンバスを床に広げ、天井から吊り下げたロープに掴まり足で描く「アクション・ペインティング」で知られています。生涯にわたって、この手法で制作を続けました。

本作は、激情的な抽象表現を求め、特に暴力的なイメージを制作していた時期の作品です。猪の毛皮と、血しぶきのような赤い絵具が、生々しく残酷な印象を与えます。狩猟免許をとり、実際に狩りにも出かけた白髪だからこそできた表現と言えるでしょう。

15 ジュリアン・シュナーベル〈マルクス〉

イメージか？物質か？

シュナーベルは、アメリカの新表現主義の作家として位置づけられ、戦後に表舞台から姿を消していた具象的な絵画を復活させました。

本作は肖像画ですが、一番に目がいくのは画面全体に貼り付けられた皿の破片でしょう。「皿の絵画（プレート・ペインティング）」とも呼ばれ、シュナーベルを代表するスタイルです。描かれている自身の友人のイメージと、突き出た皿や厚い絵具の質感とが相互に強調し合い、より確かな実在感を生み出しています。

16 篠原有司男〈首長オートバイ〉

これまでの美術をぶち壊せ

篠原は、既存の美術の枠組みを超えた作品を次々と発表し、戦後日本の前衛美術を牽引してきた一人です。1969年に渡米して以降は、ニューヨークを拠点としています。

本作は、渡米直後に作られた段ボールや廃材などによる「オートバイ彫刻」シリーズの一つです。大胆な素材の組み合わせと色遣いにより、都会の喧騒とスピード感がありありと伝わってきます。

17 篠原有司男〈バミューダ島で制作する三木富雄組〉

破天荒な時代の破天荒な男

篠原は、荒々しい色彩やイメージ、過激なパフォーマンスで衝撃を与え続けています。1988年には、「ネオ野獣派宣言」を発表しました。

本作は、篠原と親しい交流があり、人間の耳をかたどった作品で知られる三木富雄の死を偲んで作られた作品だと考えられます。同時代に活躍した、田中信太郎や針生一郎などの作家や評論家も描かれています。ド派手な色彩と今にも動き出しそうな人物たちは、当時の日本美術界の溢れんばかりのエネルギーを思わせます。

18a ポール・ゴーギャン〈ノア・ノア（かぐわしい）〉

18b ポール・ゴーギャン〈「ノアノア」ノアノア（かぐわしい）〉

かぐわしき旅

ゴーギャンは、反文明の考えと原始への憧れを抱き、南太平洋のタヒチへ旅立ちました。木版画連作〈ノア・ノア〉は、彼が初めてタヒチに滞在した際の油彩画やスケッチをもとに制作され、ほぼ同じ寸法の10点から構成されています。ゴーギャン自身はそれぞれ10枚程度、1894年に作家本人に委託されたルイ・ロワが約30部ほど刷り、1921年に息子のポーラ・ゴーギャンが黒一色で100部の後刷りを制作しました。ここでは、ポーラ・ゴーギャン版を展示しています。

19a ポール・ゴーギャン〈ナヴェ・ナヴェ・フェヌア（かぐわしき大地）〉

19b ポール・ゴーギャン〈「ノアノア」ナヴェ・ナヴェ・フェヌア（かぐわしき大地）〉

失楽園タヒチ

地上の楽園を夢見てタヒチを訪れたゴーギャンでしたが、すでに植民地化が進んでいました。遠い南国でも西洋文明からは逃れられず、彼の理想とする素朴で野蛮な楽園を求めてもがき続けることとなります。

本作の裸婦は、旧約聖書に登場するアダムの妻であり、最初の女性であるイヴだとされています。イヴをそそのかし楽園追放に追いやった蛇ではなく、翼を持った怪物がイヴに何やらささやいています。失われた楽園としてのタヒチを暗示しているかのようです。

20a ポール・ゴーギャン〈マナオ・トゥパウ (死霊は見ている)〉

20b ポール・ゴーギャン〈「ノアノア」マナオ・トゥパウ (彼女は死霊のことを考えている)〉

生と死の世界

暗闇の中で死霊におびえる娘が横たわる前景と死霊の姿が見える後景が一つの画面に描かれています。娘の丸まった姿勢からは胎児を、彼女を包み込む寝具からは子宮を連想することもでき、生と死の両方を象徴していると言えます。タヒチでは、生と死の世界がひとつながりのものとして考えられており、ゴーギャンはその原始的な神秘を描き出したのでしょう。

「死霊は見ている」はお気に入りの画題だったようで、同様の油彩画2点も描いています。

21a ポール・ゴーギャン〈宇宙創造〉

21b ポール・ゴーギャン〈「ノアノア」宇宙創造〉
万物のはじまり

本作は、オセアニアのフランス領事ジャック＝アントワヌ・ムーレンハウトの『オセアニア諸島紀行』に触発され、ゴーギャンが書いた覚書『マオリの古代信仰』の挿絵を組み合わせ制作されました。神々やその化身などが登場し、ゴーギャンがイメージするタヒチの創造神話が表現されています。混沌から万物が生み出されていく、壮大なスケールの世界観が緻密に描き込まれています。

本作には、連作の中で唯一フランス語の題名が付けられています。

22a 土方久功〈妖霊〉

日本のゴーギャン

土方は、東京美術学校で西洋彫刻の基本を学び、さらにドイツ表現主義やキュビズムの影響を受け、オシップ・ザツキン（出品番号26）の彫刻を好みました。また、ゴーギャンの『ノア・ノア』を愛読し、ヨーロッパの前衛美術家たちがアフリカ彫刻に影響を受けたり、実際に南洋へ行ったりしたことを知るうちに、自身もかの地へ赴き、生活したいと考えるようになり

ました。そして、1929年から13年間、南太平洋のパラオやサテワヌ島などで過ごし、民族学や考古学の調査研究、油彩や彫刻の制作に打ち込みました。帰国後も、南洋の風俗や島民を表した作品を意欲的に制作しました。

本作も帰国後の作品で、ゴーギャンの〈死霊は見ている〉（出品番号20）からの強い影響が感じられます。土方は、未開や原始と呼ばれる南洋の島民から、近代文明によって失われた人間の根源的なあり方を見出し、晩年にいたるまで南洋時代の思い出を表現し続けました。

22b 土方久功〈浴〉

日本のゴーギャン

土方は、東京美術学校で西洋彫刻の基本を学び、さらにドイツ表現主義やキュビズムの影響を受け、オシップ・ザツキン（出品番号26）の彫刻を好みました。また、ゴーギャンの『ノア・ノア』を愛読し、ヨーロッパの前衛美術家たちがアフリカ彫刻に影響を受けたり、実際に南洋へ行ったりしたことを知るうちに、自身もかの地へ赴き、生活したいと考えるようになりました。そして、1929年から13年間、南太平洋のパラオやサテワヌ島などで過ごし、民族学や考古学の調査研究、油彩や彫刻の制作に打ち込みました。帰国後も、南洋の風俗や島民を表した作品を意欲的に制作しました。

本作も帰国後の作品で、ゴーギャンの〈かぐわしき大地〉（出品番号19）のように、豊かな自然の中に裸婦が描かれています。土方は、未開や原始と呼ばれる南洋の島民から、近代文明によって失われた人間の根源的なあり方を見出し、晩年にいたるまで南洋時代の思い出を表現し続けました。

23 土方久功〈宿命の歩み〉

南洋の素材・道具・人々

本作は、滞在中に南洋の堅い木を素材に、島民が使う特有の手斧で作られたレリーフ（浮き彫り）です。4人の裸体の女性が歩いている姿が彫られており、島民をモチーフにしていると考えられます。細長く引き延ばされ、簡略化された人体が、装飾的に繰り返されています。素朴でどこか力強さも感じさせる造形は、南洋の生活に溶け込み、風俗や文化に直に触れていた土方だったから生み出せたのでしょう。

24 土方久功〈マスク〉

25 土方久功〈マスク〉

この顔は仮の顔？

ブロンズや木彫による土方のマスクは、デフォルメされたチャーミングな表情をしています。土方は南洋特有の仮面と出会い、もともと芝居好きでもあったために、一層創作意欲を刺激されたことでしょう。

マスクは、自分とは別の存在に変身したり、異世界と繋がったり、人間の心の奥底の内面を映し出したり…様々な意味合いを持ち、土俗的な儀礼や踊りなどで用いられます。マスクを持つ神秘的で深遠な世界観が、この小さなマスクにも広がっています。

26 オシップ・ザツキン〈女性立像〉

キュビズムと原始の美

ザツキンは、エジプトやギリシアの古代彫刻やアフリカの彫刻などが持つ、洗練された感覚による力強い表現に影響を受けました。また、ピカソなどキュビズムの作家の形態や量感の捉え方にも共鳴しました。

本作では、直角に傾いた首や凹んだ半球状の乳房、不自然にねじれた腕など、女性の身体が幾何学的な図形や立体として再構築されています。キュビズムの造形表現と原始的な美しさが見事に融合し、ザツキン芸術の独自性が見て取れる作品です。

27a エーリヒ・ヘッケル〈ブリュッケ年次画帖VI「立てる子供」〉

27b エーリヒ・ヘッケル〈ブリュッケ年次画帖VI「森の情景」〉

自然に帰り、原始を求める

「ブリュッケ（橋）」とは、20世紀初めにドイツのドレスデンで誕生した美術家グループです。オセアニアやアフリカの生活や文化を理想とし、自然への回帰や人間の原始性を求めました。度々避暑地を訪れ、自然の中で共同生活をしながら作品制作を行いました。

本作は、毎年グループの支援者らに配布していた年次画帖第6集に含まれる木版画です。ブリュッケにとって木版画は、感情の直接的な表現方法の一つとして重要でした。

28 ヴァシリー・カンディンスキー、フランツ・マルク〈青騎士年鑑〉

総合芸術誌

「青騎士（ブラウエ・ライター）」とは、20世紀初めにドイツのミュンヘンを拠点に活動した美術家グループです。1912年には、中心人物であったカンディンスキーとマルクによって年鑑誌が刊行されました。

文学や音楽、さらに民族芸術や子どもの絵などの様々なジャンルを横断するような内容が、19章のテキストと161点の図版により掲載されました。第一次世界大戦の勃発により、続号が刊行されることはありませんでした。

29a フランツ・マルク〈動物伝説〉

29b フランツ・マルク〈新ヨーロッパ版画集第3巻「創世記1」〉

動物の画家

青騎士の主要メンバーのマルクは、動物をモチーフとした作品を数多く残しています。マルクは、近代文明の中で生きる不純な人間に対し嫌悪感を持ち、一方で無垢な生命として動物を賞賛しました。

本作からも動物の姿が見出せるでしょうか。動物と自然が一体となったような原始的世界が広がっています。

第一次世界大戦に自ら志願し、36歳の若さで戦死しました。

30a-33b マックス・エルンスト〈版画集〈博物誌〉〉

驚異の自然

エルンストは、「シュルレアリスム（超現実主義）」の代表的作家です。「シュルレアリスム」とは、難しそうな美術用語ですが、簡単に言うと「すごく現実、めっちゃ現実」つまり「真の現実」を追究した芸術運動です。第一次世界大戦の大惨事を経て、近代国家の合理主義と科学技術の限界に直面した芸術家たちによって生まれました。理性のコントロールから離れ、夢や無意識、偶然性、神話的・呪術的な思考のなかに、真の現実を見出そうとしました。そのための実験や実践として、コラージュなどの様々な美術技法が編み出されました。

本作は、エルンストが発明した「フロッタージュ」による 34 点の連作です。フロッタージュは、木の板や葉っぱなどの凹凸のある表面に紙を載せ、鉛筆でこすってイメージを浮かび上がらせる技法です。無意識から生み出された未知のイメージは、現実の神秘的な自然と連続した一体をなすものとして表現されています。

34 ジョアン・ミロ〈人物〉

人物なのか？

ミロも、シュルレアリスム運動に参加しました。原始社会の人々や芸術へ関心を持ち、埴輪や土偶に関する本も持っていました。第二次世界大戦後から本格的に彫刻に取り組み、本作のように「女」や「人物」という題名の作品を数多く制作しました。そのほとんどが人間とは思えない造形です。本作も、植物の葉や実、石などの自然物が混じり合った精霊のように見えてきます。彼が表現したのは、豊かな自然と調和しながら生きる人間の本質的な姿なのかもしれません。

35 ウィフレド・ラム〈我々はここにいる〉

君たちはどこにいるのか

キューバに生まれたラムは、パリへ渡りピカソやシュルレアリスムから影響を受けました。第二次世界大戦中は、戦禍を逃れキューバへ戻ります。故郷の地で、部族社会の人々や美術、ジャングルの動植物などに刺激を受けながら制作に取り組みました。

本作には、得体の知れない生き物たちが描かれています。多種多様な生命とともに生きている私たち一人一人の存在とは何なのか、問いかけてくるようです。

36 岡本太郎〈顔Ⅲ〉

「顔は宇宙だ」

岡本は、パリで民族学を学び、縄文土器との出会いや日本各地への旅を経て、「芸術は呪術である」という宣言に至りました。彼にとって顔や目というモチーフは、宇宙と呼応する呪術的なシンボルであり、数多くの作品に繰り返し登場します。本作もその一つで、鮮やかで強烈な色彩のうねりに飲み込まれてしまいそうな神秘性をはらんでいます。生涯をかけて人間の根源を追求し作品として表現し続けた、人間・岡本太郎の爆発的な生命力が感じられます。

37 アンリ・ルソー〈パリ近郊の眺め バニュー村〉

ひたむきな日曜画家

ルソーは、27 歳から 22 年間、パリ市内に持ち込まれる物品に課される税の徴収官として働きました。本格的に絵を描き始めたのは 40 歳頃でした。美術の伝統にとらわれず、真摯に自然と向き合い続けました。

本作は、ルソーが亡くなる前年に描かれました。バニュー村は、晩年のルソーがしばしば訪れた農村でした。実際の風景をもとにしながら、牛や積みわら、農夫、低木、教会の尖塔などのモチーフの大きさや配置を意図的に変更し、独特な絵画世界を創り出しています。

38 アンドレ・ボーシャン〈地上の楽園〉

庭師が描いた美しき植物

ボーシャンは家業の苗木商を継ぎ、庭師として働いていました。第一次世界大戦中の製図の仕事の機に、復員後 46 歳で絵を描き始めました。庭師ならではの観察眼により、植物を緻密に瑞々しく描きました。

本作は、最初の人間アダムが神によって創られ、楽園で動物に名前をつけている旧約聖書の一場面と考えられます。ボーシャンは、宗教的・神話的主題を好み、そこに登場する草花や木々などを一つ一つ鮮明に描きました。植物が美しく生きる理想的な世界への憧れが感じられます。

39 ジャン・デュビュッフェ〈熱血漢〉

反芸術・反文化

デュビュッフェはパリの美術学校を中退後、家業のワイン商を継ぎましたが、40 歳頃に再び画家を志しました。伝統的な西欧の文化や芸術を批判し、子どもや精神障がい者などの作品に注目しました。それらを人間の純粹で本能的な表現衝動に基づくものとして高く評価し、「生の芸術（アール・ブリュット）」と呼びました。

本作には、熱い血がたぎるような男が力強く描かれています。厚く塗られた絵具やひっかき線からは、むき出しの生命力が溢れ出ています。

40 パブロ・ピカソ〈少女に導かれる盲目のミノタウロス III〉

ピカソの分身「ミノタウロス」

ミノタウロスは、ギリシャ神話に登場する半人半獣の怪物で、クレタ島の王の妻が牡牛に恋をした結果生まれました。王は凶暴なミノタウロスを迷宮に閉じ込め、毎年アテネの若者たちを生け贄として捧げました。自ら生け贄に志願したテセウスが、ミノタウロスを倒しました。

ピカソは、このミノタウロスを数多くの作品で表現しました。ミノタウロスを自分の分身と考え、動物的な野蛮さ、男性的な暴力性、人

間的な優しさや苦悩など様々な意味を持つ記号として用いました。

本作には、盲目のミノタウロスとその手を引く少女が描かれ、ミノタウロスにギリシャ神話のオイディプスが重ねられています。オイディプスは、意図せず実の父を殺して実の母と結婚し、後に自身の罪に衝撃を受け自ら目をえぐって盲目となり、娘に付き添われ故郷を去りました。

本作で少女が抱いている鳩は、悪を打ち倒した後に訪れる平和の象徴と捉えることができます。神話を題材としつつ、ピカソ自身の思想や感情がはっきりと投影されています。

雑誌『ミノトール』

雑誌『ミノトール』は、造形芸術や音楽、建築、演劇など多様なテーマを扱い、主にシュルレアリストがテキストや作品を掲載しました。

ピカソは、この雑誌の創刊号の表紙デザインを担当し、短剣のようなものを手に持つミノタウロスの姿を描きました。本号には、表紙以外にもピカソによるミノタウロスの口絵やピカソのアトリエの写真、ピカソについての論文などが含まれており、ピカソ特集号といっても過言ではないものでした。

41 マックス・エルンスト〈鳩のように〉

エルンストの分身「ロプロプ」

シュルレアリスムの主要作家エルンストは、ペットのインコの死と妹の誕生が重なった少年期の体験から、鳥と人間を混同した妄想を抱くようになりました。そして、鳥と人間が融合したロプロプというキャラクターを創り、自らの内面を象徴した分身として作品に描きました。

本作は、人間の顔にも、咬み合う 2 羽の鳥にも見え、エルンスト＝ロプロプの姿と解釈できます。自分とは何か、現実とは何かを問い続けたエルンストにとって、ロプロプは欠かすことのできない存在でした。